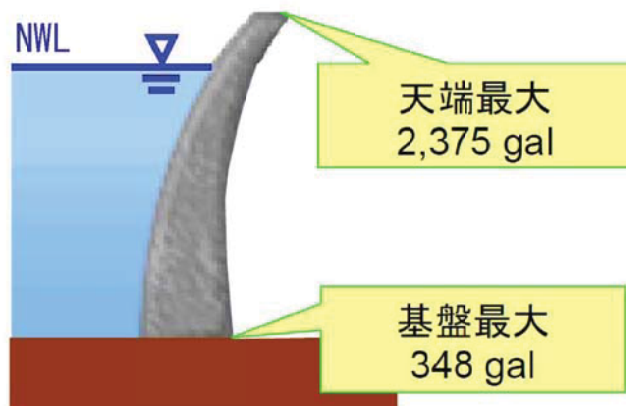


5. 照査結果

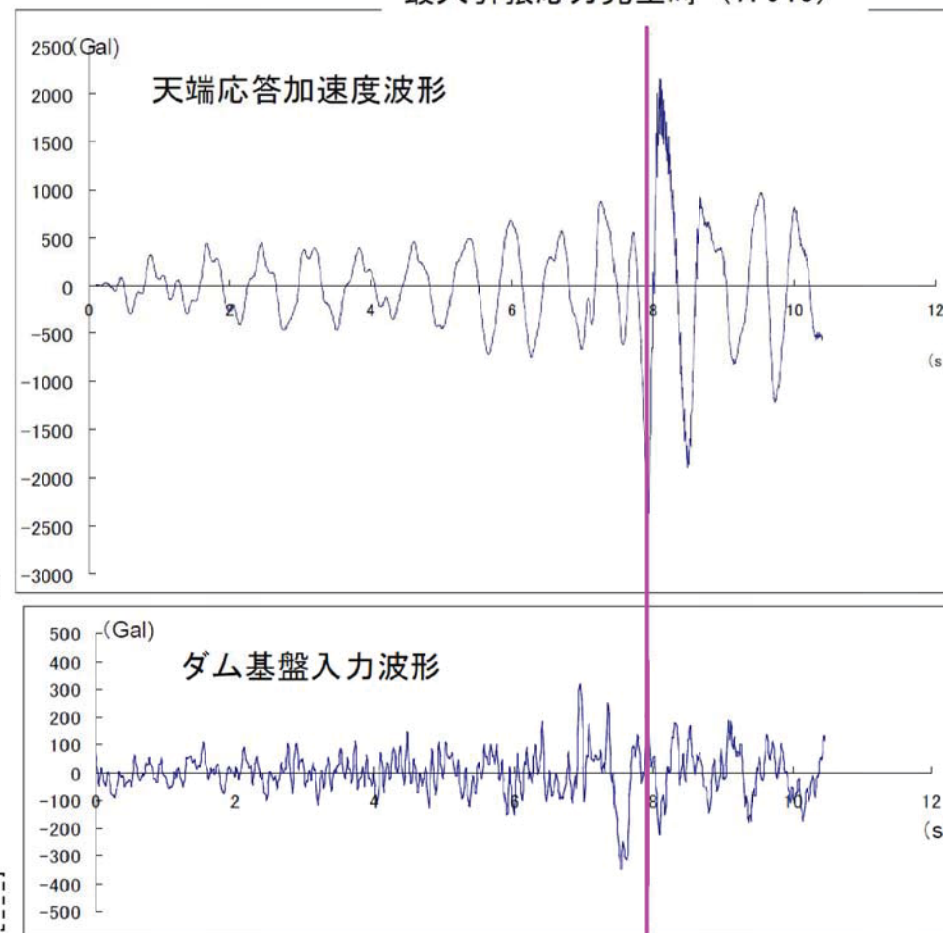
応答加速度



最大引張応力発生箇所
(鉛直方向: 4.3 N/mm^2)

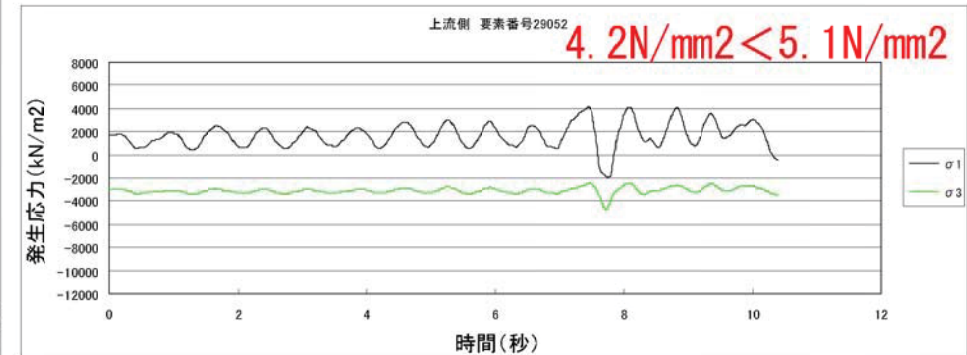
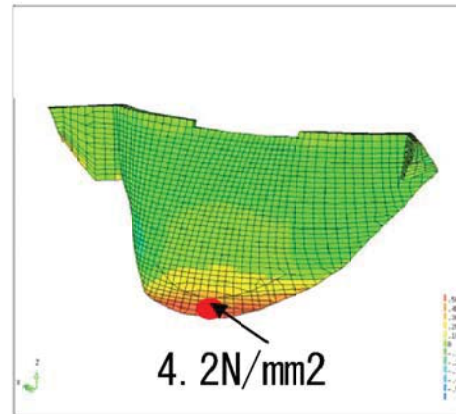
※発生応力は、NWL時の方がLWL時より大きくなる事を確認済

最大引張応力発生時 (7.91s)

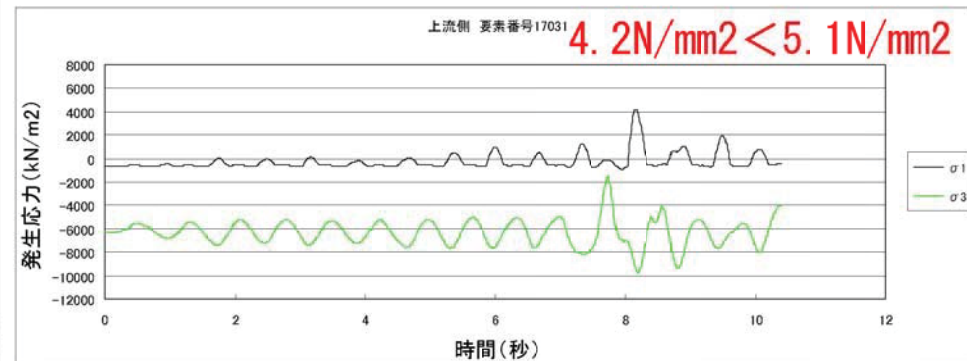
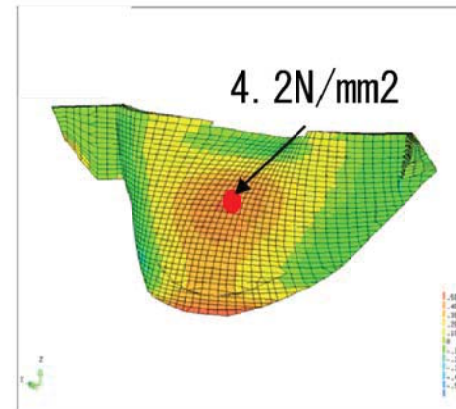


5. 照査結果

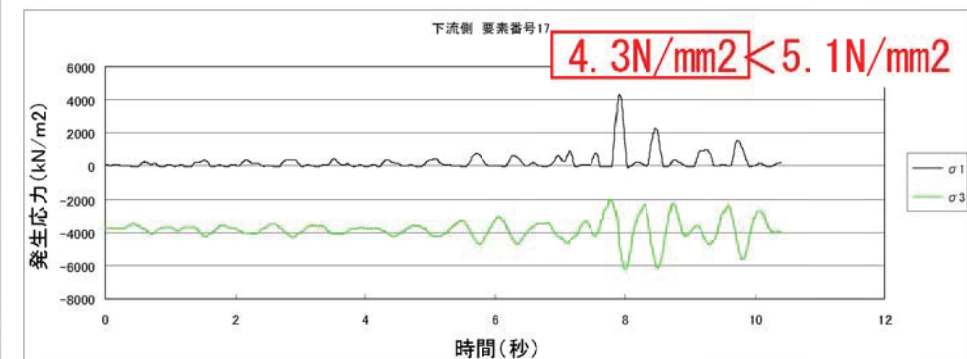
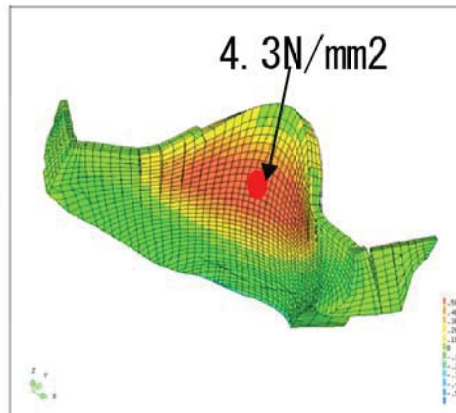
上流下端最大応力発生時 (7.45s時)
の応力分布
(上流側)



上流面最大応力発生時 (8.15s時)
の応力分布
(上流側)



下流面最大応力発生時 (7.91s時)
の応力分布
(下流側)



上図は、変形量を500倍に拡大したもの

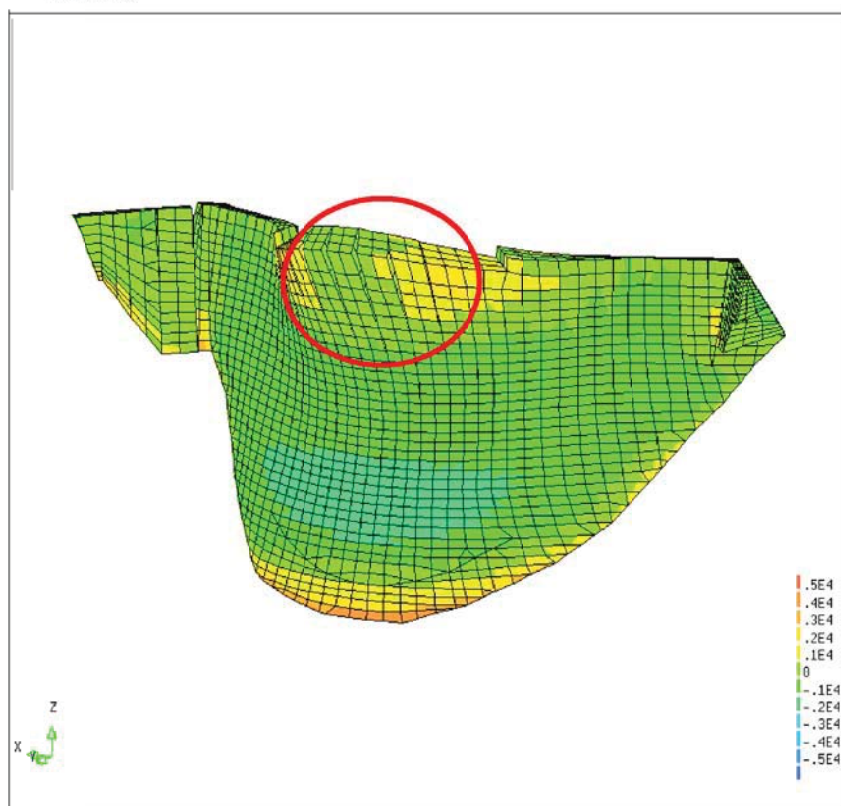
堤体内発生応力は堤体コンクリート引張強度以下となっている

5. 照査結果

《横継目の開口について》

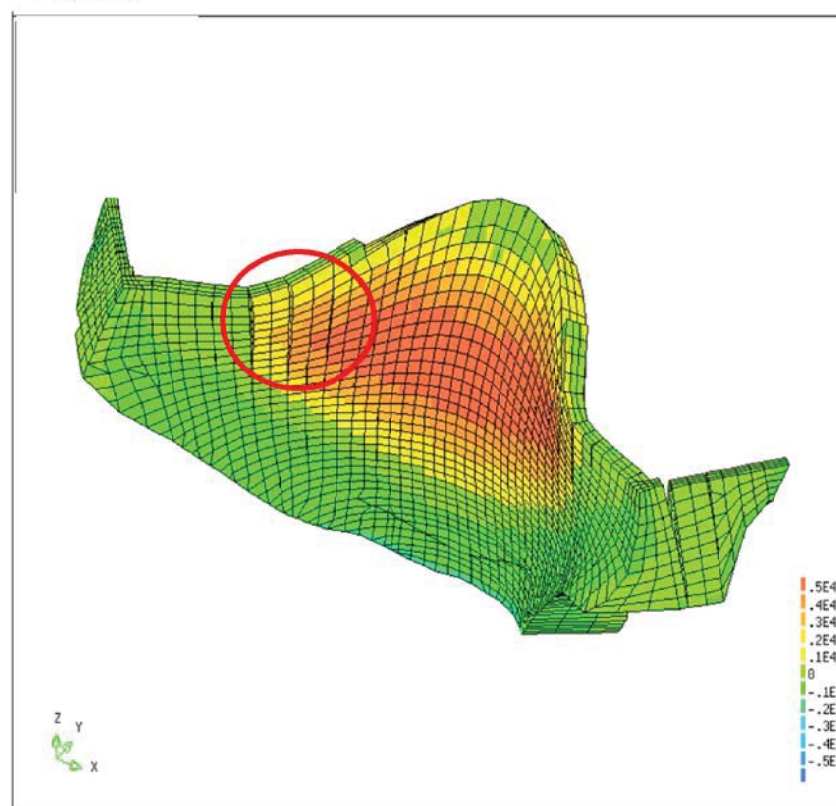
解析結果一例（7.9秒時点）

上流側



上図は、変形量を500倍に拡大したもの

下流側



上図は、変形量を500倍に拡大したもの

横継目の開口は堤体上部に限られており、その開口幅は最大3mm程度のため、キーや止水板の構造を考慮して十分許容できる※範囲にとどまっている

※国土技術総合研究所資料 第244号（平成17年3月）P121を参考とした

5. 照査結果

- ・ ダムに発生する引張応力がダム堤体引張強度以下であり弾性範囲内となっている
- ・ 堤体横継目は堤体上部で最大3mm程度開口するが、キーや止水板の構造を考慮して十分許容できる範囲にとどまる
- ・ 以上のことから、レベル2地震動に対しても本ダムの貯水機能は維持され、耐震性能を有していることを確認した